



UIFA ニュース

発行 宇治市国際親善協会

事務局 〒611-8501 宇治市宇治琵琶33 宇治市役所秘書課内

電話 0774-22-3141(内線2057) FAX 20-8776

E-mail BCH04550@nifty.com ホームページ <http://homepage3.nifty.com/uifa/>

第 53 号

平成19年(2007年)11月



ヌワラエリヤ市公式訪問団が来宇

・・・交流の継続、発展に熱い思い・・・

宇治市の友好都市であるスリランカ共和国ヌワラエリヤ市から公式訪問団が、8月8日(水)から12日(日)まで来訪されました。

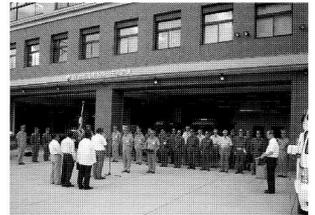
公式訪問団の来訪は平成8年の宇治市植物公園の開園式以来11年ぶりで、チャンドラ・セーカラン副市長を団長とする一行4人が友好都市交流の継続、発展に熱い思いをもって来訪され、宇治市役所への表敬訪問をはじめとする公式行事のほか、市内施設や事業所の訪問、市民交流歓迎会への出席など、精力的な交流をされました。



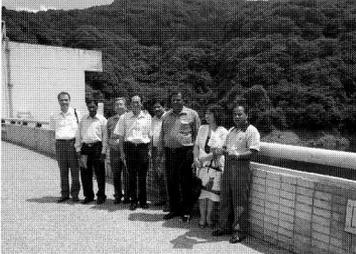
ヌワラエリヤ副市長挨拶



友好の握手



安心館見学



天ヶ瀬ダムにて



はしご車の挑戦



宇治市植物公園にて



市民交流歓迎会に出席



宇治上神社にて

咸陽市公式訪問団に参加して

団員 竹若博子記



9月6日朝、久保田市長、坂下議長を初め多くの方々の見送りを受け、小澤収入役を団長とする宇治市咸陽市公式訪問団24名は、元気に出発した。関西空港より上海空港を経て、ほぼ定刻に西安空港に降り立つと、何と“雨!?”説明会では、乾燥気候、黄砂の為、マスクや咽拭等を準備するようアドバイスされたのに・・・外事担当の王さん達の出迎えを受け、しっとり濡れる柳並木の道を一路咸陽市へ向かった。咸陽市は、今は西安市に隣接する一地方都市だが、“秦”の都城だった歴史ある都市だ。宿舎の彩紅賓館では、田外事弁主任他の温かい出迎えを受け、早速歓迎夕食会を開いて頂いた。円卓には何種類もの前菜が並び、後から次々に主菜が運ばれてきた。夜は

予想以上に涼しく、エアコン無しで寝られたのは有難かった。

2日目(9月7日)は、第十一回切手連合展に出席の後、主目的の一つである永寿県の植林地に向けて出発した。市街地には高いビルもあり道路も整備されているが、少し外れると、レンガ積みの家が多く、拡幅工事中の為か道路状態も悪くなった。沿道にはリンゴ園が続き、大型トラックに満載されたリンゴが近代的なジュース工場へと運ばれていた。乾陵見学の後、一路永寿県へ。永寿県の入り口からはパトカーに先導されて、泥濘の道を黄土高原の植林地へと向かう。前回の訪問時より随分整備されているようだ。雨の為、

雑草は緑鮮やかで植林も生き返ったように見え、上林親善協会会長のにっこり顔が印象に残る。通常は遠くから灌水を運ばなければならないので、雨は何よりのプレゼントなのだろう。予定の植林、学校訪問ができなかったのが心残りだった。



10年の歳月越えて緑なす黄土高原友好の証
夕方、咸陽に戻り、咸陽市人民政府を表敬訪問し



陽の紹介も受けました。中国の面積、地形、民族、人口、教育、宗教や生活環境、社会事情などの話や、中国文化と日本文化の違いからくる受け止め方の違い、たとえば中国と日本の「検討」の意味の違い、「日本の手紙」は「中国のトイレットペーパー」、「中国の愛人」と「日本の愛人」は別のもの、などの話も。短い時間ではありましたが、およそ五十人の参加者が講演と交流を楽しみました。

世界の国からこんにちは!

宇治市国際親善協会では平成十九年四月二十八日(土)に国際交流講演会を総会にあわせて開催しました。今年設立二十周年記念行事としてミニ講演会をシリーズで開催することとし、第一回は「咸陽と宇治」をテーマに宇治市の友好都市である咸陽市出身で、甲南女子短期大学の講師でもある呂楠さんにお話ししました。呂楠さんは「日本語に出会い日本文化に出会う最初のきっかけが宇治市民との交流で、咸陽と宇治の友好交流がなければ、高校生だった私が渭濱公園で宇治市民から送られた絵馬を見かけ、平仮名に秘められる日本語の魅力にひきつけられ、日本語に感動を覚える機会はなかったでしょう。」と日本人、日本文化に強く惹かれての甲南女子大学への留学の経緯や、その時にお世話になった方々の話しをされ、「水を飲むとき、井戸を掘る人を忘れてはなりません。」という諺を引用して宇治と咸陽の友好交流に尽力したいという思いを力強く語られました。秦の都から二千二百年の歴史を持つ咸陽、兵馬俑や阿房宮のある咸陽、三国志の舞台である咸陽、林檎の特産地の咸陽を紹介されるとともに、経済開発と環境保護に力を入れ、中国最大手のブラウン管メーカーやソフトウェア開発者しい咸陽の紹介も受けました。

た後、歓迎レセプションに参加。千軍昌市長は、お若くパフォーマンス豊かに我々を迎えてくださった。中国楽器の伴奏での「北国の春」の交換歌が宴席を盛り上げた。

3日目(9月8日)は楽しみにしていた兵馬俑博物館の見学だった。そのスケールの大きさに驚かされる。美しく彩色され永らく地下に眠っていた兵馬が、地上の空気に触れた途端に風化し色あせてしまったと知り、我が国の遺跡保存問題を重ね合わせて広い館内を回った。

昼食に西安餃子を楽しんだ後、陝西歴史博物館・大雁塔・西安城壁等を見学した。城壁が完全に保存されているのは西安だけとのことで、西塔から遙か西に伸びたシルクロードに、中国の長い歴史を再確認した。

玄奘三蔵を思い出しながら9月9日からは、行政訪問団とは別れて、北京・上海への旅が始まった。北京空港からは広い高速道路が北京市内に通じており、最速のリニアモーターカーも走っている。市内は、高層ビルと縦横に走る高速道路等、急ピッチで近代都市化する区域と古びた小さな店の並ぶ区域との落差が大きい。取り壊される胡同も見受けられた。2008年のオリンピックに向け、北京は工事ラッシュ。天気なのに夕日や朝日を直視できるのは、スモッグの為なのだろうか。

ユネスコ文化遺産の故宮博物館は、今も尚修復が続けられ、その広大さ、華麗さ、豪華さに圧倒された。ざっと見学するだけで何時間もかかってしまう。

夕方訪れた天安門広場では、毛沢東の額が一際目立った。国旗は毎日護衛兵によって揚げ下ろしされるそうだ。丁度日没時で、交通機関は止められ、人々が旗の周りに集まってくる。中国の人達の国旗にかける思いを強く感じた。

北京での2日目(9月10日)は、八達嶺へ。遙か彼方の稜線を長城が延々と繋がっている。祭りの人手のような賑わいで、三々五々頂上を目指した。峻険な山岳地帯によくもまあ建設されたものだ。宇宙から望見できる唯一の人工建造物だそうだ。飲茶を楽しんだ後、明の十三陵に向かった。これは明時代の皇帝の陵墓で、地下27メートルに造られた十三代の万成帝陵を見学した。沿道は果樹園に変貌しつつあり、桃、梨、葡萄等が栽培されていた。

帰途、オリンピックのメイン会場になる鳥の巣を遠望し、北京料理の店へ。ここは北京ダックが名物で美味だったが、後に京劇・雑技団観賞が控えていたので心を残しながら席を立った。

早朝(9月11日)にホテルを出て、上海へと向かう。隣の席の若い女性が咸陽出身だと判り、友好都市の宇治市から親善訪問して来た事等を話し、交流

のひと時をもてたことは幸いだった。豫園を見学後、初めて市場の中を二人以上の条件付で自由行動の時間をもらった。探していた茉莉花茶を見つけ、予想より安く買えた?ので大満足。

同じ大都市でも上海と北京では印象が随分違う。商業都市と首都。歴史的背景等理由は多々あるだろう。高層ビルでも上海のそれは、一つ一つが個性を主張しているようで、興味を引かれた。日本企業の広告塔や英語の看板も多数あって親しめる感じがする。勿論旧市街には小さな古い家も多数あり、街路に突き出した竿に洗濯物が干してあるのには少々驚いた。

外灘では、500メートル近いテレビ塔をバックに撮影会。夕食後、遊覧船で夜景を楽しむオプション



にも参加し、素晴らしい夜景を心行くまで楽しんだ。

9月12日、訪問旅行もいよいよ終わりに近づき、水郷の町周荘の見学だ。上海には山が無いことを実感しつつ快調にドライブ。久し振りに田園風景を見る。点在する集落の屋根飾りを見なければ、日本の何処かを旅している気分だ。米の二期作に冬は小麦を栽培しているそうで、農家は永寿県のそれとは比べ物にならないくらい立派だった。

周荘は九州の柳川を連想させる水郷の町だった。水運で巨万の富を得た豪商の屋敷跡を見学したり、手漕ぎ舟で遊覧を楽しんだりして、ひと時を過ごし、上海へと戻った。

9月13日、初めは殆どが知らない者同士だった団員が、宇治市訪問団という絆に結ばれ、他の旅行では味わえない緊張感、連帯感、親密感のある旅行だった。日程の関係上、スケジュールは少々強行ではあったが、全員が揃って帰国でき、久保田市長や先に帰国された行政訪問団の方々、また多くの職員、家族に出迎えて頂いたこと、我々訪問団を温かく受け入れてくださった感陽市対応に感謝しつつ筆を置くことにする。

友好の歴史の上に一頁

我が訪問団も責務を果たす

(挿入の句は同行の今川博団員の作品です。)



ヌワラエリヤ市の一行を歓迎

スリランカ友の会

宇治市の友好都市ヌワラエリヤ市から来訪のチャンドラ・セーカラン副市長らを迎えて、市民交流歓迎会を8月10日に木幡公民館で、スリランカ友の会と宇治市国際親善協会により開催しました。市民レベルでの交流をより深めるため、今年で設立20周年を迎えるスリランカ友の会の中川恵次会長の挨拶で開会。坂下弘親顧問の司会進行により、スリランカの伝統衣装を身にまとして、練習を積み重ねてきた踊りの披露や、童謡のプレゼントを。訪問団一行からはコーラスの返礼があり、歌声交換で楽しいひとときを過ごしました。



料理、踊りで思い出を！

また、スリランカ友の会お手製のチキンや野菜をターメリックが入ったイエローライスに盛り付けるカレー、ココナツファインやオレンジピーマンを使ったミズナのサラダなどスリランカ国の伝統料理に舌鼓を打ちました。

青年海外協力隊 村落開発普及員 松本亮平さんからのおたより

宇治市とヌワラエリヤ市の親善交流事業について

ヌワラエリヤ市は標高2,000mの高地に位置する、緑豊かな田舎町です。周囲をお茶畑に囲まれ、湖を擁し、イギリス植民地時代の建築様式が今も見られることから「リトル・イングランド」の別称でも人々に親しまれています。また、地理上の理由で霧が発生しやすく、「霧の町」と呼ばれることもあります。主な産業としては、有名な紅茶と、農業が挙げられます。標高2,000mの高地ともなると、平地に比べ、気温が15～17℃ほど低くなります。スリランカは北緯5～10°の熱帯に位置しているものの、平地の気温が20℃前後の場合、ヌワラエリヤでは3℃まで下がります。この寒冷な気候と濃い霧が、質の高い茶葉を育む土台となっているわけですが、気温がそこまで低くなると、日本では初冬にあたる季節ですね。街行く人々はコートやマフラーを身につける頃でしょう。この時期はまさに冬。身を切るような寒さの中、日本から送ってもらった湯タンポを抱えながら眠りにつく日々が続きます。しかし、凜と澄んだ空気の中、幾千もの星が浮かぶ夜空と、吐く息の白さが作り出すコントラストは、日本の都

会ではすっかり見ることができなくなったものを思い出させてくれます。

私の着任後、貴宇治市と当ヌワラエリヤ市の友好関係に大きな進展があったことについて言及いたします。貴市より寄贈予定であった中古ノート型PC(25台)に関する手続きが、一昨年3月から再開され、様々な紆余曲折を経ましたが、なんとか5月中旬に同PCの引き取りを完了することができました。寄贈いただきましたノート型PCは、市長の意向により、ヌワラエリヤの市民向けに「無料PC教室」を開催し、同教室において活用させていただいております。現在、学生49名および一般民間人31名、計80名が同教室に在籍しており、市長をはじめ、市職員、PC教室の講師および生徒にいたるまで、貴市の貢献に感謝しています。

最後になりましたが、ヌワラエリヤ市と宇治市が友好都市として訪問団による交流を行うことができる日が、一刻も早くきてくれることを願ってやみません。そして、両市の市民の皆様がさらに活発な交流を展開していけるよう祈念いたします。(抄)

【第4回国際交流講演会のお知らせ】

日時：平成19年12月15日(土)

午後2時

場所：宇治市生涯学習センター

第2ホール

講師：フィンランド共和国

エーバ・バウフクリネンさん

雑感 雑観

八月にスリランカ・ヌワラエリヤ市から、十月にカナダ・カムループス市から公式訪問団を迎えました。また、九月には宇治市からも中国・咸陽市への公式訪問団を編成して訪問しました。これらの交流が、市民の草の根交流を發展させ、また、新たな出会いをつくり、国際理解に大きく貢献していることはいうまでもなく、人との出会いはとても楽しく、豊かな文化を育むために欠かせないことだとあらためて思うと同時に、訪問団の受入れにご協力いただいた皆様に厚くお礼を申し上げたい。今後も活発なそして魅力ある交流が進められることを願って、本紙を通じて会員の皆様にも多くの情報を提供して参りたいと思っています。ご協力をお願いします。(河原崎)